

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19H00564

研究課題名(和文) イスラームおよびキリスト教の聖者・聖遺物崇敬の人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Studies on Veneration of Saints and Holy Relics in Islam and Christianity

研究代表者

赤堀 雅幸 (Akahori, Masayuki)

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：20270530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,600,000円

研究成果の概要(和文)：イスラームとキリスト教について、ともすると教義的に逸脱とみなされてきた聖者・聖遺物崇敬の諸相を対象として、人類学者の現地調査による事例研究の蓄積と、それらの事例研究に基づく理論化を行った。アブラハムの伝統において、崇敬が唯一神崇拜にむしろ不可欠の内在的な要素であるとの基本的な仮説を出発点に、新たな形での崇敬が今日的な信仰の形として広まりつつあることを明らかにした。その上で、聖者の聖遺物化、聖遺物の聖者化といった相互的過程を典型に、ヒトとモノを媒介して働く崇敬のありようについて理解が深まり、それらを可能にする恩寵の分有についてさらに研究を行うことが必要との見解に達した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アブラハムの伝統における唯一神信仰を現実には補完する聖者・聖遺物崇敬という発想は、宗教一般における世界観の一元性と多元性の問題を考えるに際して重要な考え方であり、そうした崇敬が人格化と物象化の両面をもって機能しているとの理論は、また世界を構成するヒトとモノの関わりを考えるのにも有用な議論となりうる。事例研究を通じたこれらの議論は研究会や研究合宿を通して子細に検討されて世代を超えた調査研究グループの発展をもたらした。さらに、フランスやトルコの研究機関との共催による国際ワークショップ開催を通して研究の国際連携も推進され、毎年度の公開シンポジウムや論集刊行を通して研究成果の社会還元も進められた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on various aspects of the veneration of saints and holy relics, which are sometimes considered deviations from Islamic and Christian doctrines. We have attempted to theorize these practices based on an anthropologist's collection of case studies from field research. We started with the basic hypothesis that veneration is an essential element of the worship of the One God in the Abrahamic tradition and demonstrated that new forms of veneration are spreading today as a form of faith. We then showed how veneration operates through the medium of human beings and objects, exemplifying reciprocal processes such as the objectification of saints and the personification of relics. Further research is needed on the sharing of grace that enables these processes.

研究分野：人類学、イスラーム地域研究

キーワード：崇敬 聖者 聖人 聖遺物 イスラーム キリスト教 一神教 宗教

1. 研究開始当初の背景

ユダヤ教に端を発するアブラハムの伝統を継承しつつ世界宗教へと展開したキリスト教とイスラームは、超越的唯一神を「崇拝 (worship)」する一方で、神ならざる多様な存在への信仰として聖者や聖遺物に対する「崇敬 (veneration)」を人々の間に生み出してきた。こうした「崇敬」を民族誌上に取り上げるだけでなく、理論化する試みとしては、「民衆イスラーム (popular Islam)」概念がこれまで頻用されてきた。さらに、E・ゲルナーは民衆イスラームという概念を一步進め、啓典を重視する厳格な P 特性群に対して、崇敬に代表される寛容な C 特性群を認めて対置し、それらの往還として信仰のダイナミズムを説明した。同時に、ゲルナーはキリスト教についても両特性群のせめぎ合いの存在を示唆しており、そこから崇敬はイスラームとキリスト教にまたがって研究対象とすることで、さらに有効な視角を得られる事象であるとの見通しが立つ。しかし実際には、同類の発想に立つて両宗教を取り上げた崇敬の人類学研究は緒に就いたばかりといってよい。さらに、これまでのところ崇敬の実践的側面である巡礼や参詣、そのための場である聖者廟などに焦点を合わせた研究が多いのに対して、聖遺物崇敬の人類学的研究はイスラームでもキリスト教でもむしろ 19 世紀の方が多いいえるほどで、モノの人類学などと関連付けつつ、現代的な枠組みに立った分析を試みる価値は充分にある。

かくして、中東を調査地とする人類学者にとって古く新しい問題といえる聖者・聖遺物崇敬の研究の推進にあたって、本研究が根底に据えるのは、アブラハムの伝統に沿った一神教において、教学上に逸脱、異端とされがちな聖者・聖遺物崇敬が、歴史上にはかくも深く広く、とりわけて民衆の間に受け入れられてきたという事実をどのように受け止めるべきかという問いである。これについて、民衆が本来の信仰から逸れがちであるといった理解ではなく、崇敬が神と人をつなぐ不可欠の内在的な要素として、絶対的唯一神への崇拝に対抗し補完する役割を担っているという仮説を本研究の出発点とする。ここから派生する副次的な問いとして、近代化およびグローバル化の過程において、崇拝のみを認めて崇敬を退ける政治化した信仰が勢いを得たのとは別に、人々の間になお根強く存在し、形を変えて広まる信仰の形とは何かを、崇敬の現代的様相の観点から明らかにすることもまた、本研究の根幹に関わる重要な問題設定となる。

2. 研究の目的

上述の「問い」に答えるため、地中海周辺域を対象として、2016~2018 年度の 3 年間にわたり、研究代表者と 4 名の研究分担者とその他連携研究者によって実施した基盤研究 (B) [JSPS 科研費 JP16H03531] を踏まえて、対象地域を広げ、研究分担者を大幅にふやして、それぞれが慣れ親しんだ調査地で、本研究の主題に沿った現地調査を実施し、これを体系的に比較考量して、仮説の検証に向けて議論を深めることが本研究の目的である。絶対的唯一神の崇拝という立て付けの下で、人々が形あるヒトやモノへの崇敬をどのように捉え、実践してきたのか、また、どのようにしてかつての崇敬を保ち、あるいは変形し、あるいは新たな形で再生しつつあるのかという問いは、地域により様々な形で答えられ、様々な観点から調査が可能であろう。

上記を十全に実行するには、イスラームとキリスト教の双方の崇敬について過去の研究例を十分に振り返り、本研究への参加者間でそれぞれの研究内容を含めて共通認識を育てることが前提となる。加えて、この研究をさらに発展的に展開するための研究組織の整備も本研究の大きな課題である。本研究はイスラームの聖者崇敬の研究を出発点として、これをキリスト教へと拡張して構想されたため、イスラームを対象として研究する人類学者がより多く参加しており、研究の意義の理解もその範囲ではかなりの程度まで共有されているが、キリスト教の崇敬を研究する人類学者からはあまり積極的な参加を得られていない。その点で、研究期間中に積極的に研究協力者を募り、必要に応じて研究分担者を追加して、よりバランスのとれた機能的な研究組織を形成することも目指さなくてはならない。

言うまでもなく本質主義的観点からイスラームとキリスト教を類比もしくは対比する著作は枚挙に暇がないが、精密な現地調査を行い、文献資料を渉猟して、聖者・聖遺物崇敬の諸相を見通す視点を確立しようとする本研究は、むしろ安易な本質論を退けるのに有効に働く。また、本研究はイスラームとキリスト教の違いを超えて、民衆的な実践における信仰のありようの共通性を浮き彫りにすると予測され、それは宗教宗派対立や宗教の原理主義的側面に目が向けられがちな今日の研究状況を相対化すると同時に、それら対立を生み出す構造に対しては、生起する事件を追いかけるに留まらない複眼的視点を導入することを可能にする。加えて、伝統的歴史的な崇敬の形から、情報技術を用いた聖者・聖遺物崇敬、もしくはその後継となる崇敬のあり方にまで目を向け、グローバル化する現代における信仰の形をそれまでの継続と断絶の両面にわたってみることで、ポスト原理主義の時代における信仰の形についての考察も期待できる。翻って、本研究は、研究代表者である赤堀が本来専門とし、長年にわたって続けてきたイスラームの聖者崇敬に関する人類学的研究をより豊かにするのにも有効であり、それは研究分担者の個別の研究についても同様に当てはまる。研究手法の面では、人類学、歴史学、思想研究が交錯し啓発しあう共同研究の一つの範型として、本研究の展開と成果を広く示すことにも意義がある。

3. 研究の方法

研究の目的を十全に達成するために、(1)分野的、地域的にバランスの取れた研究組織を形成して、(2)研究会および研究合宿の着実な積み重ねを活動の中核とし、これに(3)個別現地調査による各個の研究の深化、(4)共同現地調査の実施による知識と関心の共有を組み合わせた。また、(5)国内所蔵のない関連文献・資料の収集に努め、(6)将来的に共同研究への参画が望ましい専門家の国内外に及び研究ネットワーク形成も進めた。(7)成果の発表の面では、国内外の研究機関との連携による公開の国際ワークショップを組織的に開催しつつ、個別の論文等の発表を促し、それらの論考を取りまとめて専門的な論集の刊行準備を進めた。(8)成果の社会還元としては公開シンポジウム、講演会の実施と専門家以外に向けた講演録の刊行を実施した。

研究開始時点において予定していた具体的な取り組みは以下の通りである。

- (1) 研究組織：8名の人類学者に1名の思想研究者、5名の歴史学者を加えた14名からなる共同研究とし、大学院学生、若手研究者の育成も視野に多くの研究協力者の参加を促した。
- (2) 研究会・研究合宿・ワークショップ：研究会は年間2回を予定し、これとは別に、1泊2日の研究合宿と、国際学会での発表の予行練習を兼ねた英語によるワークショップを毎年度開催することとした。
- (3) 個別現地調査：個々の研究者が長期的な視野に立ってそれぞれの調査地で行っている調査と本研究の趣旨とを、事前に研究打ち合わせの中で摺り合わせ、あくまで共同研究の一環として、毎年度数名を各専門地域ないし調査経験のある地域に派遣することとした。
- (4) 共同現地調査：特定の調査地にその地域の専門家とその地域を専門としない研究者を併せ派遣する共同現地調査は、研究者を専門地域における常識から解き放ち、新たな視点で研究に取り組むきっかけを作り出すのに大きな効果があり、積極的に実施することとした。
- (5) 文献収集：国内に所蔵のない聖者・聖遺物崇敬関連文献を収集し、上智大学アジア文化研究所の蔵書として、広く学生、教員の用に供することとした。
- (6) 国内外に及び研究ネットワーク形成：上智大学イスラーム研究センター(SIAS)のウェブサイト、独自に運営するメーリングリスト、学会等のウェブサイト、メーリングリスト等を介して、研究情報を発信するとともに、関心と能力を兼ね備えた研究者に共同研究への参加を呼びかけ、さらなる人的資源確保を行うこととした。
- (7) 成果公開：研究分担者各個の口頭発表や論文刊行に加えて、以前より研究交流を行っている京都大学ケナン・リファーマー・スーフイズム研究センター(KR)やフランス国立社会調査センターの社会・宗教・ライシテ班(CNRS-GSRL)の研究者と連携して毎年度公開の国際ワークショップを日仏で交互に開催し、最終的には2022年度開催の第6回中東研究世界大会(WOCMES Tunis 2022)では、パネルを組織して全体としての成果発表を行い、これを元に2024年度以降に日英語の論集を刊行することとした。
- (8) 成果の社会還元：上智大学が学生を含む専門家以外の人々に向けてその研究成果を開示する期間であるSophia Open Research Weeks(SORW)の企画の一環として、毎年度公開シンポジウムや講演会を開催し、その内容を講演録として、イスラーム研究センターが刊行する不定期刊行物であるSIAS Lecturesの一部として刊行することにした。

4. 研究成果

出発点となる仮説である、聖者・聖遺物崇敬がアブラハムの伝統において、唯一神信仰を内在的に補完する働きをなしているとの認識は、国内外の多くの研究者からもその妥当性が前向きに評価されるようになった。また、その議論の延長上に、崇敬の焦点となる聖者・聖人と聖遺物がヒトとモノという二つの様態でもって、信仰に具象性を与え、その際に聖者が物象化し、聖遺物が人格化して相互に浸透するような様子が見られることについても、多角的な視点から議論がなされ、モノとヒトの柔軟な関係性について、宗教人類学の観点から理論的考察を進展させる可能性について検討が進んだ。さらに、聖者・聖人の崇敬と聖遺物の崇敬をつなぐものとして、形をなさぬ恩寵の働きに注目すべきとの知見が研究期間の後半には提起され、本研究を継承発展させる研究の方向性として、恩寵の形をとった聖性が、ヒトやモノ、空間や景観など多種多様な形で分有され流通することに注目した研究が提唱された。

その一方、キリスト教における聖画や聖像の広範囲の使用や、イスラームにおける聖者の血統を介した聖性の継承などは、両宗教における崇敬の違いとして注目できる点は幾度となく指摘されたが、これを系統的に上述の議論に組み込んで理論的に展開するまでにはいたらなかった。

また、2020年初頭に始まる新型コロナウイルスの流行は、2020年度前半には研究の全面的な停滞を招き、後半に入ってオンラインでの研究会や講演会は可能になったが、個別と共同とを問わず、現地調査については実施がきわめて困難な時期が2022年度前半まで続いた。研究期間の中盤に、本研究の根幹をなす現地調査が充分に行えなかったために、2022年度後半から2023年度にかけては、研究とりまとめの時期であるにもかかわらず、現地調査にかなりの力を入れざるをえなかったのが残念である。その一方、新型コロナウイルス流行期間中に、オンラインを利用した様々な調査研究手法が新たに工夫され、今後も対面的な調査研究と併用されて、これまでより多彩で効果的な取り組みが可能になった側面は、意図しなかった研究上の副産物となった。

具体的な研究の実施状況と成果は以下の通りである。

- (1) 研究組織：オンラインの活用によりこれまで以上に緊密に研究打ち合わせを実施した。また、上智大学、京都大学、CNRS 関連教育機関を中心に多くの若手研究者の参画が得られた。
- (2) 研究会・研究合宿・ワークショップ：5年間に12回の研究会を実施した。このうち、2019年度(2回)は対面、2020年度(3回)、2021年度(4回)はオンライン、2022年度(2回)、2023年度(1回)はハイブリッドの実施となった。年度末実施を予定していた研究合宿は、2019～2021年度は実施できず、2022年度はハイブリッドにより1回、2023年度は対面により1回(1泊2日)実施することができた。
- (3) 個別現地調査：2019年度は研究分担者2名がそれぞれ米国、エジプトで調査を実施したが、2020年に入って現地調査が実施できない状況となり、2021年度はかろうじて1名が長崎で調査を行うに留まった。2022年度には徐々に調査が可能になり、山口、ウズベキスタン、エジプト(2名)、米国で各1名が調査を実施した。2023年度はインド、イラン、エジプト(2名)、チュニジア、ノルウェー、マルタでの調査を実施するなど、本来予定していた実施状況を実現することができた。
- (4) 共同現地調査：2019年度には研究分担者3名、研究協力者5名の8名がセネガルで、研究代表者、研究分担者の4名がフィリピンで調査を実施した。2020年度、2021年度は実施できなかった。2022年度には、研究代表者、研究分担者、研究協力者各1名の3名により長崎で、さらに研究代表者、研究分担者、研究協力者各1名の3名によりトルコで調査を実施し、2023年度には研究代表者、研究分担者の3名に研究協力者1名の4名でフィリピン、研究代表者、研究分担者、研究協力者各1名の3名によりトルコ、国際ワークショップ開催を兼ねて短期間だが、研究代表者、研究分担者3名、研究協力者2名の5名によりフランスでも実施した。
- (5) 文献収集：2021年度までは収集した図書を上智大学アジア文化研究所の蔵書として中央図書館での利用を可能にした。2022年度にイスラーム研究センターが新たに常設の研究センターであるイスラーム地域研究所(SIAS)に改組されたことから、以降はこの研究所の蔵書として、収集資料を公開することとし、配架方法について現在、交渉中である。
- (6) 国内外に及ぶ研究ネットワーク形成：大学院学生、若手研究者を含む多くの国内外の専門家との間に連絡を保ち、発展させることができた。オンラインの連絡方法の発達により、より機動的にネットワークを運用することが可能になったことの効果は大きい。とくに本研究が拠点としたSIASと、京都大学のKRとは2022年度に学術協定を結んで連携は密であり、さらにフランスのCNRS-GSRLや、急速に連携を深めたトルコのウスキュダル大学スーフイズム研究所(ISS)とは今後も研究協力を継続し、協定締結も視野に入れている。
- (7) 成果公開：当初パネル組織を予定していたWOCMES Tunis 2022は中止され、開催地も定まらぬままの状況にある。SIAS、KR、CNRS-GSRLの3機関連携によって、本研究の成果を発表する公開の国際ワークショップも、2019年度は実施できず、2020年度に2019年度予定分も含め2回、2021年度に1回をオンラインで実施した。2022年度には1回のオンライン実施の後、ようやく年度末に日本での対面実施を回復し、2023年度にはフランスでの対面実施も実現した。またSIAS、KR、ISSの連携により2022年度に小規模な公開国際ワークショップ、2023年度には大規模な公開国際シンポジウムをトルコで開催した。最終的な成果として予定する日英語の論集各1冊については、現在、SIAS Occasional Papersもしくは市販書として刊行すべく準備を進めている。
- (8) 成果の社会還元：SORWの企画として、2019年度には対面の公開シンポジウム、2020年度、2021年度はオンデマンドの連続講演会、2022年度はウェビナーによる公開シンポジウム、2023年度はオンデマンドの連続講演会を開催した。とくにオンデマンドの講演会は都合のよい時間に繰り返し視聴できることや、海外からもアクセスできることが好評で、対面の講演会をはるかに上回る視聴者数を数え、その実施方法について他の研究プロジェクトからも注目されるなどした。また、研究分担者1名が2020～2022年度に作成した短編民族誌映画2作品が、英国王立人類学協会他国内外複数の映画祭で入選するなど、視覚的に本研究の成果を広く知ってもらうのに貢献した。

総じて、新型コロナウイルスの流行によって、当初の予定通りに研究活動が展開できないことが多く、その対応に追われる期間が長い共同研究となったが、理論面での成果を示す複数の論文を含めて、多数の関連論考を研究代表者、研究分担者、研究協力者が発表し、着実に国際ワークショップやシンポジウムを開催して国際的な研究連携を推進し、また、大学等で副教材として使用できる講演録を着実に刊行するなど、当初企画に沿った成果を上げられたと判断する。加えて、すでに述べたように、この期間中にオンラインを介した新たな研究打ち合わせが一般的になり、研究会の開催形式やオンデマンドやオンラインによる成果発表、社会還元の手法も多元的に展開することが可能になったことも大きな成果である。さらに、本研究の着実な実施を含めたイスラーム研究センターの活動が、研究代表者の所属先大学から評価され、イスラームの名を冠する日本で唯一の常設地域研究拠点として、イスラーム地域研究所が開設されたことも、本研究の大きな成果といえるだろう。今後は最終の成果論集を刊行し、さらに発展的な主題の追及に向けて新たな共同研究を始動することが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計50件（うち査読付論文 27件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 38件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Morita (Fujiwara) Kuniko | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 Emerging Trends of Multisensory Engagement with Religious Objects in Mediterranean Malta: Between Averages and Authentic Twists | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 甲子園大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 17～26 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Yasuda Shin | 4. 巻 11(5) |
| 2. 論文標題 Mapping Pilgrimage in the Marketplace: Social Contexts of Bisnis Hajj dan Umroh in Indonesia | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 International Journal of Religious Tourism and Pilgrimage | 6. 最初と最後の頁 5～16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21427/A4Q5-5329 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 新井 和広 | 4. 巻 103 |
| 2. 論文標題 現代インドネシアにおける預言者一族の位置づけ：アブドゥッラー・ビン・ヌーフほかの論考から | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 東洋文化 | 6. 最初と最後の頁 75～104 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20635/00001332 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 高橋 圭 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 聖者崇敬からみたエジプトの近代化 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 白山史学 | 6. 最初と最後の頁 25～45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 森本 一夫 | 4. 巻 103 |
| 2. 論文標題 現代イランの大衆向けサイド論：パーゲリヤーン・モヴァッヘッド著『サイドの奇蹟』をめぐる | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 東洋文化 | 6. 最初と最後の頁 31～54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Morita (Fujiwara) Kuniko | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 The Rise of New Thoughts on the Evil Eye: Unevenly Shared Knowledge and the Daily Consumption of Religious Objects in Catholic Malta | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 甲子園大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 23～32 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 小特集 スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明に向けて イスラーム聖者信仰研究とその周辺：四つの対比から | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 イスラーム世界研究 | 6. 最初と最後の頁 138～148 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/269341 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 東長 靖 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 小特集 スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明に向けて スーフィズム理解の模索と展望：三極構造論と四象限論 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 イスラーム世界研究 | 6. 最初と最後の頁 163～179 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 丸山 大介 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 <小特集 スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象の解明に向けて>タリーカ研究の課題と方向性：実践コミュニティから見るスーフィズムと集団 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 イスラーム世界研究 | 6. 最初と最後の頁 149～162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34428/00013093 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 新井 和広 | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 サイドの特権を保証する権威とは何か：1931年にバタヴィアで出版された『真実の説明』を手がかりに | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 人文科学（慶應義塾大学日吉紀要） | 6. 最初と最後の頁 1～23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Morimoto Kazuo | 4. 巻 30 |
| 2. 論文標題 Sayyid-ness beyond the Borders of South Asia | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the Royal Asiatic Society | 6. 最初と最後の頁 505～511 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S135618632000036X | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 三代川 寛子 | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 聖家族のエジプト逃避行：形ある伝説 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 総合文化研究 | 6. 最初と最後の頁 45～50 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Futatsuyama Tatsuro | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 Thinking Islam through Things: From the Viewpoint of Materiality of the Qur'an | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies | 6. 最初と最後の頁 69～80 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/250324 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Yasuda Shin | 4. 巻 13 |
| 2. 論文標題 Divine Materiality of the Vanished Sahaba: Religious Commodification of Hujr b. 'Adi al-Kindi in Syria | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies | 6. 最初と最後の頁 56～68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/250323 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計175件 (うち招待講演 48件 / うち国際学会 78件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 赤堀 雅幸 |
| 2. 発表標題 神と聖者と男と女：イスラーム聖者崇敬の支え手 |
| 3. 学会等名 TUFS Cinema ウズベキスタン民族誌映画上映会 『神授の花：フェルガナの女性とイスラーム』 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 新井 和広 |
| 2. 発表標題 インドネシアにおける預言者ムハンマドの一族：高貴な血統を持つ生身の人間 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会 (SORW 2023企画) 「イスラームにおける聖性の継承：預言者・聖者の血統と聖遺物」 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小牧 幸代 |
| 2. 発表標題 南アジア・イスラーム世界と聖遺物信仰 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2023企画）「イスラームにおける聖性の継承：預言者・聖者の血統と聖遺物」 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 丸山 大介 |
| 2. 発表標題 大統領は『聖者』か？：スーダンにおける宗教的権威の政治利用 |
| 3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 三沢 伸生 |
| 2. 発表標題 オスマン帝国とイスラームの聖遺物 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2023企画）「イスラームにおける聖性の継承：預言者・聖者の血統と聖遺物」 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 森本 一夫 |
| 2. 発表標題 世界に広がる預言者ムハンマドの一族 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2023企画）「イスラームにおける聖性の継承：預言者・聖者の血統と聖遺物」 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 和崎 聖日 |
| 2. 発表標題 民族誌映画『交霊とイスラーム：パフシの伝えるユーラシアの遺習』の上映と解説 |
| 3. 学会等名 日本アルタイ学会（野尻湖クリルタイ） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akahori Masayuki |
| 2. 発表標題 Reviewing Anthropology of Sufism: Changing Perspectives |
| 3. 学会等名 ISS, Uskudar University, International Symposium, " Bridging Mystical Philosophy and Arts in Sufism: Poetry, Music and Sama ' Ritual " (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Fujiwara Kuniko |
| 2. 発表標題 The Impact of COVID-19 on Maltese Religious Practices: Focusing on the Transformation of the Use and Disposal of Objects |
| 3. 学会等名 14th International Religious Tourism and Pilgrimage Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Maruyama Daisuke |
| 2. 発表標題 Politicizing the Concept of Dhikr in Contemporary Sudan: The Interdependence of Sufism, Dhikr, and Nafs in Political Discourses |
| 3. 学会等名 11th SIAS/CIAS-CNRS Joint Seminar, "Sufism and Saint Veneration: Past and Present" (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 東長 靖 |
| 2. 発表標題 愛の言葉、愛の音、愛の踊り |
| 3. 学会等名 SIASシンポジウム (SORW 2022企画) 「スーフイズムにみる音と身体の技法」 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 三代川 寛子 |
| 2. 発表標題 20世紀エジプトにおける聖メナス崇敬の復興運動 |
| 3. 学会等名 東方キリスト教学会2022年度大会シンポジウム「東方キリスト教諸教会における「聖なるもの」への崇敬：人・物・場所」(招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 和崎 聖日 |
| 2. 発表標題 愛と道徳、韻と旋律のスーフイー詩：中央アジア南部地域の現在 |
| 3. 学会等名 SIASシンポジウム (SORW 2022企画) 「スーフイズムにみる音と身体の技法」 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Miyokawa Hiroko |
| 2. 発表標題 The Revival of St. Menas Veneration in Egypt |
| 3. 学会等名 12th International Congress of Coptic Studies (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Wazaki Seika |
| 2. 発表標題 Seance and Islam: The Eurasian Legacy as Transmitted by the Bakhshi |
| 3. 学会等名 10th SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 東長 靖 |
| 2. 発表標題 スーフィズムとは何か：神秘主義・道徳・民間信仰 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会 (SORW 2021企画) 「今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る」 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 丸山 大介 |
| 2. 発表標題 寛容と排他に揺れるスーフィズム：スーダンに見る政治との距離感 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会 (SORW 2021企画) 「今日のスーフィズム：神秘主義の諸相を知る」 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Terada Takefumi |
| 2. 発表標題 500 Years of Roman Catholicism in the Philippines: Evaluating the Field of Research |
| 3. 学会等名 12th International Convention of Asian Scholars (International Institute for Asian Scholars, the Netherlands) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 赤堀 雅幸 |
| 2. 発表標題 聖者の末裔部族：エジプト西部砂漠における聖性外来の論理 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2020企画）「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 赤堀 雅幸 |
| 2. 発表標題 イスラームおよびキリスト教の聖者・聖人崇敬概説 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2020企画）「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 藤原 久仁子 |
| 2. 発表標題 聖像も外出禁止：ロックダウン下におけるマルタ島カトリックの新たな日常 |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2020企画）「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 二ツ山 達朗 |
| 2. 発表標題 神とムスリムを介する聖者・聖遺物・聖木：チュニジアの事例から |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2020企画）「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 三代川 寛子 |
| 2. 発表標題 20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興 |
| 3. 学会等名 日本オリエント学会第62回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 安田 慎 |
| 2. 発表標題 聖者に仮託する人生：シリアにおけるサイイダ・ザイナブ廟とカルバラーの人びと |
| 3. 学会等名 SIASオンライン講演会（SORW 2020企画）「イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち」 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Fujiwara Kuniko |
| 2. 発表標題 Authentic Replica and Miraculous Souvenirs: Towards a New Framework for the Study of Copied Goods |
| 3. 学会等名 IUAES Congress 2020 "Coming on Age on Earth: Legacies and Next Generation Anthropology" (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小牧 幸代 |
| 2. 発表標題 パキスタン系ムスリム移民の生活誌：オスロのリトル・パキスタンを中心に |
| 3. 学会等名 SIASオンラインシンポジウム（SORW 2019企画）「ディアスポラのムスリムたち：異郷に生きて交わること」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 高橋 圭 |
| 2. 発表標題 イスラモフォビアのアメリカに生きる：分断から連帯へ |
| 3. 学会等名 SIASオンラインシンポジウム（SORW 2019企画）「ディアスポラのムスリムたち：異郷に生きて交わること」 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yasuda Shin |
| 2. 発表標題 Rethinking Islamic Leisure: Islamic Tourism, Religious Entertainment, and Moral Economy in the Concept of Maqasid Sharia |
| 3. 学会等名 11th Annual International Religious Tourism and Pilgrimage Conference（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計48件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸（編）、赤堀 雅幸、東長 靖、和崎 聖日、鈴木 麻奈美、近藤 文哉（著） | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム地域研究所 | 5. 総ページ数 104 |
| 3. 書名 スーフイズムにみる音と身体の技法 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸（編）、赤堀 雅幸、東長 靖、丸山 大介、ダヌシュマン イドリス、藤井 千晶、二宮 文子（著） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム地域研究所 | 5. 総ページ数 112 |
| 3. 書名 今日のスーフイズム：神秘主義の諸相を知る | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 森本 一夫、井上 貴恵、小野 純一、澤井 真(編)、赤堀 雅幸、森本 一夫、小田 淑子、中田 考、加藤 瑞絵、平野 貴大、狩野 希望(他著) | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 ナカニシヤ出版 | 5. 総ページ数 678 |
| 3. 書名 イスラームの内と外から：鎌田繁先生古稀記念論集 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸編、赤堀 雅幸、二ツ山 達朗、藤原 久仁子(森田 久仁子)、安田 慎 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター | 5. 総ページ数 112 |
| 3. 書名 イスラームおよびキリスト教における崇敬の人類学：一神教の聖者たち、聖人たち | |

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 タラル・アサド著、赤堀 雅幸監訳、近藤 文哉訳・解題 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター | 5. 総ページ数 88 |
| 3. 書名 イスラームの人類学について考える | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸(編)、赤堀 雅幸、小牧 幸代、高橋 圭、新井 和広、久志本 裕子、岡戸 真幸(執筆) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター | 5. 総ページ数 92 |
| 3. 書名 ディアスポラのムスリムたち：異郷に生きて交わること | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 赤堀 雅幸(編)、赤堀 雅幸、宇野 昌樹、三代川寛子、田村 愛理(執筆) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 上智大学イスラーム研究センター | 5. 総ページ数 88 |
| 3. 書名 中東に生きる宗教的少数派の人々：その暮らしと祭り | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|---|
| <p>上智大学イスラーム研究センター(2022年度より上智大学イスラーム地域研究所) https://dept.sophia.ac.jp/is/SIAS/</p> <p>研究分担者である和崎聖日による下記映像作品も本研究の成果である。</p> <p>Iqbol Meliqo' ziev, and Adham Ashirov (producers) 2020 Guli Armug'on: Women's Local Islamic Ritual in Uzbekistan (日本語版:和崎聖日、イクバル・メリコズィエフ、アドハム・アシーロフ、木村暁共同制作 2021 『神授の花:フェルガナの女性とイスラーム』)</p> <p>Wazaki Seika and Adham Ashirov (directors) 2022 Seance and Islam: The Eurasian Legacy as Transmitted by the Bakhshi, produced by Wazaki Seika, Adham Ashirov, and Kimura Satoru (日本語版:和崎聖日、アドハム・アシーロフ監督 2022 『交霊とイスラーム:パフシの伝えるユーラシアの遺習』和崎聖日、木村暁、アドハム・アシーロフ制作)</p> |
|---|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 東長 靖 (Tonaga Yasushi) (70217462) | 京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授 (14301) | |
| 研究分担者 | 寺田 勇文 (Terada Takefumi) (20150550) | 上智大学・総合グローバル学部・教授 (32621) | |
| 研究分担者 | 三沢 伸生 (Misawa Nobuo) (80328640) | 東洋大学・社会学部・教授 (32663) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 二ツ山 達朗 (Futatsuyama Tatsuro) (20795710) | 香川大学・経済学部・准教授 (16201) | |
| 研究分担者 | 丸山 大介 (Maruyama Daisuke) (60749026) | 防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群）・人文社会科学群・准教授 (82723) | |
| 研究分担者 | 和崎 聖日 (Wazaki Seika) (10648794) | 中部大学・人文学部・准教授 (33910) | |
| 研究分担者 | 小牧 幸代 (Komaki Sachiyo) (20303901) | 高崎経済大学・地域政策学部・教授 (22301) | |
| 研究分担者 | 安田 慎 (Yasuda Shin) (60711653) | 高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301) | |
| 研究分担者 | 藤原 久仁子（森田久仁子） (Fujiwara Kuniko) (00464199) | 甲子園大学・栄養学部・准教授 (34505) | |
| 研究分担者 | 森本 一夫 (Morimoto Kazuo) (00282707) | 東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601) | |
| 研究分担者 | 新井 和広 (Arai Kazuhiro) (60397007) | 慶應義塾大学・商学部（日吉）・教授 (32612) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 高橋 圭 (Takahashi Kei) (60449080) | 東洋大学・文学部・助教 (32663) | |
| 研究分担者 | 三代川 寛子 (Miyokawa Hiroko) (90614032) | 東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

| | |
|--|--------------------|
| 国際研究集会 11th SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar, "Sufism and Saint Veneration: Past and Present" (September 1, 2023 at College de France in Paris) | 開催年 2023年～2023年 |
| 国際研究集会 10th SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar (February 17-18, 2023 at Toyo University's Training Center in Atami) | 開催年 2023年～2023年 |
| 国際研究集会 9th SIAS/KIAS-CNRS Joint Seminar (online, March 18, 2022) | 開催年 2022年～2022年 |

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|-------------------------|--------------|------------------------|------|
| トルコ | ISS, Uskudar University | | | |
| フランス | CNRS-GSRL | CNRS-CETOBaC | College de France, CEO | 他2機関 |